

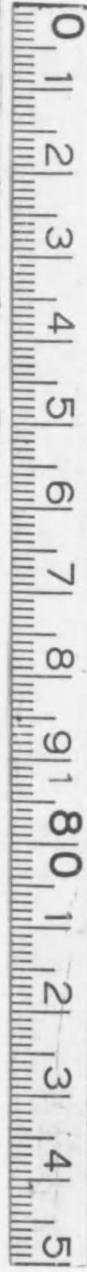
特 259

822

5/4

江松吉千熊
口風野静年野

九



始



特259
822

坂戸金剛拾
九代右近氏
但遺稿據二
拾三代右京
氏慧心鈔校

熊

野

梗概

(所) 京都

(季) 三月



遠江の國池田の宿の長熊野は平宗盛に召され都に在りしが古郷の病母より
 の文を持ち侍女朝顔が迎ひに上りければ其由を申しひたすら歸國の暇を
 願へ共許されず此春の花見んとて清水寺へ伴はれけりされど母の上忘れ
 がたく「いかんせん都の春も惜しけれと馴あづまの花や散らん」と詠みし

かば宗盛衰に思ひ終に暇をあたへければ熊野は嬉しく古郷へと急きけると
 なり。



熊野(本三番目)

役別	装束	附
シテ熊野	面孫次郎 鬘 鬘帶 着竹箔 唐織 扇 短尺袂入ル	
シテツレ朝顔	面小面 鬘 鬘帶 着竹箔 唐織 文徳巾ス	
ワキ平宗盛	黒風折烏帽子 着竹厚板 白大口 長絹 腰帶 扇	
木刀持一人	素袍 男	
作物	花見車	

熊野

^位是^見平の宗盛也。おもき江の淵
 池田は宿の長とハ熊野とヤレ。
^ト久〜〜とめを母の芳
 ちりとヤレて度々^{タビ}暇を^{イハ}と^{コヒ}ハカ。
 け春斗りハ花見の供と存^{イハ}イハ。

順をおきぐん。いふはける。

大カ括

コ兒

お前ん

慈野順の事や

大カ括

さぶらぶら

畏てら

ヨ上
の身

夏の川

春の川

さく

さくはるを待ねん

さく

幸ひの國池田の宿は長者の宿は

朝白とや女にて侍らふ 白 扱も

アサガホ

池田の宿は長と慈野とやふ

盛のふよ召をれはひ久後らり

も侍らふぬぬよを母の心方ら

次の卵よち入の程ふけ度い朝白が

モツテ
ホカ

道に上りふ 上 去の程は縁は夜の

ムツ
アカヒ

目もそめてし
幾多苦の宿
ならん人も救ふ船
苦もあらず早く急いで
業因やまをぬく
池田の宿より

船もたつてよつたる由それく
舟中へ
苦しき時ては人の父母たりは
人なるをたもあらずに舟なか
池田の宿より船もたつてよつて
なに船もたつてあらずに舟なか

を母の^{コナク}はがら^{コナク}の^{コナク}何と^{コナク}入^{コナク}者^{コナク}ぞ

^{コナク}改^{コナク}の^{コナク}お^{コナク}よ^{コナク}ら^{コナク}ん^{コナク}程^{コナク}よ^{コナク}ち^{コナク}道^{コナク}い^{コナク}ふ^{コナク}よ^{コナク}う^{コナク}て^{コナク}い

^{コナク}ら^{コナク}眼^{コナク}の^{コナク}お^{コナク}ぬ^{コナク}ふ^{コナク}よ^{コナク}う^{コナク}久^{コナク}あ^{コナク}ぬ^{コナク}ら^{コナク}事^{コナク}も

な^{コナク}〜^{コナク}ぬ^{コナク}お^{コナク}ぬ^{コナク}の^{コナク}あ^{コナク}ら^{コナク} ^{コナク}せん^{コナク}と^{コナク}ま^{コナク}ふ

あ^{コナク}ぬ^{コナク}の^{コナク}ら ^{コナク}ア^{コナク}ラ^{コナク}セ^{コナク}ウ^{コナク}シ^{コナク}イ^{コナク}あ^{コナク}ぬ

い^{コナク}よ^{コナク}時^{コナク}と^{コナク}待^{コナク}や^{コナク}う^{コナク}ふ^{コナク}ん^{コナク}ま^{コナク}て^{コナク}な^{コナク}ら^{コナク}ま^{コナク}さ^{コナク}ぞ

よ^{コナク}の^{コナク}ら^{コナク}目^{コナク}よ^{コナク}ら^{コナク}ち^{コナク}て^{コナク}ら^{コナク}眼^{コナク}の^{コナク}事^{コナク}や^{コナク}か^{コナク}ま^{コナク}ふ

ま^{コナク}ら^{コナク}に^{コナク}て^{コナク}い^{コナク}ふ^{コナク}誰^{コナク}ら^{コナク}入^{コナク}ら^{コナク} ^{コナク}誰^{コナク}

に^{コナク}て^{コナク}渡^{コナク}り^{コナク}ゆ^{コナク}ぞ^{コナク}を^{コナク} ^{コナク}徳^{コナク}野^{コナク}の^{コナク}い^{コナク}ま^{コナク}は^{コナク}て^{コナク}い

^{コナク}あ^{コナク}ら^{コナク}た^{コナク}る^{コナク}由^{コナク}ら^{コナク}ち^{コナク}ら^{コナク}い^{コナク} ^{コナク}心^{コナク}持^{コナク}ち^{コナク}て^{コナク}い

い^{コナク}ふ^{コナク}中^{コナク}よ^{コナク}い^{コナク}徳^{コナク}野^{コナク}の^{コナク}い^{コナク}ま^{コナク}ら^{コナク}に^{コナク}て^{コナク}い

い^{コナク}ふ^{コナク}と^{コナク}や^{コナク}せ ^{コナク}思^{コナク}て^{コナク}い^{コナク} ^{コナク}ま^{コナク}あ^{コナク}ら^{コナク}い

を母の如く
を母の如く

よせしむるを母の如く

何とを母の如く

諸君よ
車泉の

春は秋の愛を
碎く端となり

躑躅山宮乃秋の如く
終るを如く

志も北を
末世一代
愛の如く

毛生
死の如く
道れあり

二月乃
如く
何とやらん

春は
年ふり
増る
朽木
操今
母針

の花を
たよ
弱き

を
学あ
ふり
も
潤は
周ぶ
たり

なり元ノ位唯物タノづくシカよシあラうニにヤし
志ハづク此ノ眼ニとシて今一度
海ノおとりノあらはらいノ親子
一世の中ノならぶ一世ノたらふ縁ひ
終ニて孝行ヲまとりてあらはます
唯タ也カすレぐも命ノ内ノ今ノたらふ

見ル事ヲらはせしましたらぬ
まははらぬ別れノ有らぬ事
いふ事ヲももとしてあらはます
古ノ言ハまとりてあらはます
書キします上にあらはます
在ルノ業年ノ身ノ朝ノ傳ナリ

ア
リ
フ
ラ
ナ
リ
ヒ
ラ
ソ
ノ
ミ
テ
ウ
マ
カ
シ
マ
シ
タ
リ

一 ^{カサメ} 長き ^ハ 信 ^ニ 娘 ^ノ 志 ^ハ 母 ^ノ 志 ^ニ あり
なり ^ハ 扱 ^ク 業 ^ニ 平 ^ニ 心 ^ニ 別 ^カ 別 ^カ 別 ^カ の
お ^ク も ^ク 子 ^ノ 代 ^ト 彩 ^ノ 子 ^ノ 為 ^ト
詠 ^ミ 一 ^ノ 事 ^ト 哀 ^レ け ^ル な ^マ じ
^{下女} 今 ^ハ か ^サ ち ^ニ 泣 ^キ ぬ ^ル 涙 ^ト あり ^ト 入
^{カエ} 東 ^ノ 下 ^ノ 糸 ^ヲ せ ^テ 付 ^ラ へ ^ん 志 ^ハ 母

の ^心 志 ^ハ 母 ^ノ 志 ^ニ あり
別 ^ノ 事 ^ト 有 ^リ 春 ^ノ 斗 ^ノ の ^も 盛 ^ニ
い ^づ づ ^ら ん ^粒 娘 ^ノ 志 ^ハ 母 ^ノ 志 ^ニ あり
を ^恐 れ ^た 志 ^ハ 母 ^ノ 志 ^ニ あり
成 ^テ 付 ^ラ へ ^ん 幼 ^ノ 志 ^ハ 母 ^ノ 志 ^ニ あり
な ^れ 志 ^ハ 母 ^ノ 志 ^ニ あり 今 ^ハ 限 ^リ 付 ^ラ へ ^ん

中

是のついでなる玉の緒はあらに別業
にあらん。眼場はまはるく入

穢の餘りふと弱き女は任せしむ

けふはしむとを慰むのもん

の車洞舟にして暮るを慰まんと

日
牛烟車あせして

キ車寄大小方アリ
後ス車出ス
詰切ナリ

水のおもすくもれは山に春の
もさうり。東山とても東山せめて
なまの心はあまらま。うなは清き
きどんはせんはあまらま。弱車のカ
なまの心はあまらま。うなは清き
水のおもすくもれは山に春の
もさうり。東山とても東山せめて
なまの心はあまらま。うなは清き
きどんはせんはあまらま。弱車のカ
なまの心はあまらま。うなは清き

て花の香くる事早し。秋後も霜
あうしてあふまはし。山郭子山有て
山を中道多うして道極り
な。お春へお向くしてあま
来さす。人樂し人愁ふは皆
世よの有様なり。中 誰か云し

小 10 歳
春の色実長深なる東山。上。四條
み條乃橋の上。お春若男女
中。浅部鄙。あまの衣神を連れ
て行末の。お春とて入るを
え。笑九まは花盛名。お春の
あまの衣。上。お春の
あまの衣。

遠くくの福もなく車大路
 やら彼野乃地花豊よと伏すむ
 親きも同座あり菊は救世の方便
 強ふむらちねを守り給くや
 実や守りの末は頼む命は白玉
 の出さるる寺も赤らぬと道のと
 日 上

名 実怖しやけ道は真途
 通ふなる地を心やそる山
 煙の末も海を渡む声も旅屋の横
 だたる 北斗七星の星の星のたま
 御法の花も咲くなる
 是れならちめを守
 日 上

ぬあつら子安の塔をさびら上女まの
涼ゆく駒の道 日 ちや程もなく
是そけ ヤ 車舎り 日上 馬待め
下 爰よつち車ありあは衣ざりま深
飾磨のかちあままらつ乃佛のち
茶よ志補して母の形控をちさん

下女 南や大慈大悲の親世を母よ
なせそたびね コ いろ誰か者
太カ拵 茶よ コ 然聖行かよ者ぞ
太カ拵 茶よ コ 清堂ふぶ座の コ けしと
かせ 太カ拵 畏てい コ いろふちの上掬ハ
地まはるの下にち座ゆひては酒宴乃

始ハジまつてシよシらシ〜ハ〜ハあアれレとトの
事コトにニてテよヨ シメテらラ面オモ白シ〜
笑シみミらラ花ハのノまマとトのノ春ハルのノ心ココロ
面オモ白シ〜ハ シメテらラ シメテらラ シメテらラ
とト面オモ白シ〜ハ シメテらラ シメテらラ シメテらラ
あアらラわワらラれレてテ シメテらラ シメテらラ シメテらラ

ク エリ
実マコトやヤあアらラいイ内ウチふフあアれレ色イロおオにニらラ
たタらラ シメテらラ シメテらラ シメテらラ シメテらラ
歌ウタきキもモあアらラいイ又マタ解トキあアりリ本ホノまマ シメテらラ シメテらラ
蝶テフ舞マシふフ鈴スズたタらラきキ シメテらラ シメテらラ
常トコ花ハのノ行ユキにニあアるル人ヒトをヲ流ナガ水ミヅにニ
随ツてテ香カのノまマとトのノ疾ハヤ〜ハ シメテらラ シメテらラ
シメテらラ シメテらラ シメテらラ シメテらラ

空を雲と濁して声のあらゆるは
 清の寺に鐘の声祇園精舎を歌
 諸の無常乃声やらん地を権現の
 花はまは女は双樹の理りなり生者
 必滅の世れぬひの冥例一有糖ひ
 佛も元は捨し世のまをよとぬ

仕舞
 終りの山は名を跡す寺は桂の橋
 をしらまおては殿のまをあらん
 初様の祇園林下の系
 空にふ眺むれ
 大慈擁護乃
 為る終野権現の梅もは御名も
 河に今終野縮むは山の所を系は

初
 上
 女
 南
 上

青かじし露の秋又露の春の清水
の唯救めさむき一かきこころの
を盛^{ウツ} 空の若れ^{ウツ} 桐^キ 厚^コ のもたさる
深き情^{ナカ} を人^{ヒト} や志^シ ね^ネ しく^シ 夢^{ユメ}
なれ^{ナレ} しく^シ 何^{ナニ} にも^ニ 欲^{ホシ} め^メ じ^シ け^ケ ず^ズ
舞^{マユ} せ^セ じ^シ ぬ^ヌ び^ビ しく^シ 舞^{マユ} せ^セ じ^シ ぬ^ヌ び^ビ しく^シ

コトハ
中^{ナカ} の^ノ 事^{コト} 中^{ナカ} の^ノ 舞^{マユ}

中^{ナカ} の^ノ 事^{コト} 中^{ナカ} の^ノ 舞^{マユ} な^ナ ぶ^ブ しく^シ 只^{ただ} 今^{イマ} の

村^{ムラ} あり^{アリ} した^{シタ} の^ノ 女^メ だ^ダ とい^イ へ^ヘ ば^バ 只^{ただ} 今^{イマ} の

急^{ムラサキ} ぬ^ヌ べ^ベ に^ニ ぬ^ヌ べ^ベ 救^{サツ} め^メ ば^バ 意^イ 情^{ニョウ} の^ノ ぬ^ヌ や^ヤ ば

今^{イマ} 迄^{マデ} の^ノ 盛^{ウツ} ごと^ト け^ケ ち^チ 花^{ハナ} を^ヲ ち^チ ら^ラ せ^セ ば^バ

意^イ 情^{ニョウ} ち^チ ら^ラ な^ナ の^ノ む^ム ら^ラ せ^セ ば^バ 意^イ 情^{ニョウ} の^ノ ぬ^ヌ や^ヤ ば

春^{ハル} 雨^{アメ} の^ノ 海^{ウミ} 邊^ヘ ち^チ ら^ラ せ^セ ば^バ 意^イ 情^{ニョウ} の^ノ ぬ^ヌ や^ヤ ば

カ

カ

花ちるを借もぬ人や何る種はしぬ 赤上オク

花留ハハシ文 白ヌキテ

あし花やまよし有けなら河の枝中ハハヒ 天カク

取上見れいふせん都の春下ノ女

掛けれどコノ花 別一未だもあや歌ヲ唄フ

ちからん 実表あつた理也アハレ

いよまや〜眼くらさらなり。

コノ花

赤まらつては〜上ノ女 何の眼とどや

中ノ車疾〜下ノ女 あら

有様や嬉〜付カルク やは是知者のお利生也

是迄なりやカク 嬉〜付カルク やは是をなり

や嬉〜カク 家はて嬉よお供せ又もや

御志の愛方〜カク けい後よお暇と

又... 道...
 の... 坂...
 も... 花...
 又... 又...
 又... 又...

千手

梗概 (所)相模國

(季)三月

三位中将重衡は清盛の五男にて、生田の森の戦には副將軍たりしが
 一の谷にて敗れ、鎌倉に囚はれとなりしかば、頼朝は狩野介をして之れを護ら
 しめ、又手越の長の娘千手といへる美姫をおくりて慰ませめさせたり。狩野介
 は雨中のつれづれに酒を持ち、千手は頼朝の旨をうけて琵琶琴を持ち
 伺候する。重衡は千手をして出家の望みを頼朝に傳へ置き、けれど朝敵と
 て許されざればかひなき身を歎きけるを、狩野介千手と共に酒をす
 めいろくと慰め居たりしが、重衡は又都へ送らるゝに、千手は涙と共に、
 あかぬ袂を介ちけるとたう。

千手 (本三番目)

ワ	シテツレ	シテ	役別
キ宗茂	重衛	千手	装束附
梨子打鳥帽子 着附厚板 大口直垂上下 白鉢巻 短刀 扇	放髪 着付色無厚板(唐織) 大口腰帶 袷袢 扇	面探次郎 髷 髷帯 着付袴 唐織着流 扇	

千々

^{コト}柳是、謙倉殿の御内よ仕中。
 将軍の女宗茂にては、おもお玉の
 御子之位に申將、主衛の御人、
 成あひ、在謙倉まで、お庭を、
 たては、ようく、お方りかせとの事

によりの時日もら湯をうきやが如よ
 此今昔も子母の氣を遣をされ
 ていかのひまは茶と中へ^吐の長
 娘成が後子絶くゆるより^{ヨリトモ}頼
 のひま近く^{メシツカ}使われを^{ツカ}遣はされ
 中事^{ナカコト}成り有^{アリ}難き^{ガタシ}志にて^シ今^{イマ}日^ヒハ

雨中にて^{チカ}は^ハ酒を^シ勤め^シ重^シ働
 の郷を^{ナグサ}念め^サや^サと^サ好^シむ
 今^{イマ}は^ハ昔^キ流^ルへ^カと^トづ^クる
 これや^{コノ}河^カま^マや^ヤ成^ニらん^ニ ^上それ
 春^{ハル}の花^{ハナ}と^ト樹^キは^ハ冬^{フユ}の^ト月^{ツキ}也
 水^{ミヅ}底^{ソコ}も^モ流^ルむ^ムも^モ世^ヨの^ノを^ヲう^ケる^ル者^{モノ}也

とらふていふ妻やなむの其古く
雲の上かきしよあらぬ身のか
浪は遠し船は遠からざるもの
と怨ならで者より恨らるる
たふだもともあぬは涙あるを
かや キヤ 上 ウ 陸奥の忠ぶな
ぬ

雨のきき キキ 雲かきしよ
あまのこゝろはあはれなり
花もあはれ アハレ 涙を袖乃色
までもあまの夕乃類 タタ ひろか
いふ誰か コト 入ら ゲ 涙を流りぬ
を ヲ 子 コ ま マ せ セ ぬ ヌ の ノ 心 ココロ あり アリ に ニ して シテ け

来たたる由の中へ
まよひ侍り

重傷
の機嫌を以て披露中さうずらして
身は是様死一日の深命、蜂蝶の
定めなきに似たり、心は換武が胡玉
捕まれば、名宿の肉ふら就られて
君をどうぞなれぬを、まの廣利が

謀斗にて敵を亡り、旧里ふぬる。
我の心なく、教はよ、就らまきて。
累世の責と、あつらふと、あつらふと、
限ならん、あらん、あつらふと、あつらふと、
いふ上、いふ下、いふ中、いふ外、
何子まよひ、何子まよひ、何子まよひ、

成なりとも今日けふの對面たいめんにたまはるまるる由よし
ふらふら海うみへいくく 畏おそいいふふ

心こころままのの由よし披ひききかかててままのの行ゆきとと思おもははらら
ままののちちのの對面たいめんにたまははるる由よし
作つくらら 是こゝもも私わたしよよららままのの雨あめの
中なかとと對たいめめのの中なかのの形かたちのの作つく

よよしし親おやのの形かたち持もたたせせししままのの由よし
ををししててままのの由よし

ままのの中なかににままのの由よしににててままのの後のち
のの形かたち持もたたせせししままのの由よしににててままのの後のち
のの形かたち持もたたせせししままのの由よしににててままのの後のち
のの形かたち持もたたせせししままのの由よしににててままのの後のち

上
雨あめの中なかとと對たいめめのの中なかのの形かたちのの作つく
作つくららししててままのの由よしににててままのの後のち

小
説

よ〜くはなすは、ちか事なまきと。
唯だぬいと清すじ、
ふみちるまうて、妻をわかん
と押戻ぐ御簾の追風自ひある
花の都人よ花〜あからん
実や東の果〜やそ人のむれ果

書
摘

深〜い其情、我故なまき花の春
紅葉の秋たが思ひあ〜成ぬらん
いふ子まよせあ、昨日あ〜らねばに
かた〜が家の暇な事まらぬ
か〜うな我を、
あが朝敵の事なを私とて

お家と許し合はせぬお家の
と我を結らひて^ト毒も^ツお家の内
推さるまゝ^トあらせし^ト程おまぐと
中^トあらせして^ト我^トゆ^トか^トひ^トな^ト死^ト
お家の^ト心^トを^ト割^トく^ト我^トゆ^ト
主衛
口惜や我一の谷よとく^トも^トお^トぢ^トか

身の生捕ま^トぬよ^ト舌^トの^トな^トら^トん
今又東北^ト果^ト途^トも^ト森^トは^トあ^トを^トて^ト
さら^トき^ト車^ト 糸^ト世^トの^ト靴^トひ^トとい^トひ
ながら又思^トふ^トも^ト父^ト命^トふ^トよ^トる^トも
佛^ト像^トを^トて^トり^ト人^ト壽^トを^ト造^トち^トし
現^ト當^トの^ト罪^トを^ト深^トき^ト事^トお^ト業^トも^トある^ト

粉コ飛トうウうウこコそソいイハ
コト上ウ女ニ実ニは
 ちチ理リをヲ飛トらラかカらラ剣ケンさサへヘ今イマよヨ
 多タきキ習ナひヒとト中ナカのノをヲ獨トコりリとト家カ
 歌ウタきキ流ナひヒそソとトよヨ 主衛
 実ニ能ニ愈ニあハ
 流ナらラまマだダくクひヒにニいイらラしシ其ソノ身ミのノ果ミ
カ女ニ衛ニ 今イマ衛ニ 今イマのノ果ミ
 昨日キノのノ花ハナとト葉ハ 主衛
 今イマのノ果ミ

東トウのノ春ハルよヨあアまマ 主衛
 梅ウメのノ香カきキ芳フ
 芽メはハ花ハをヲ 上
 思オモひヒ唯タ世セにニ空カラのノ
 からカラ衣イ 妻メ 主衛
 あるアル 於オ此コをヲ井イとト立タ離リれレ終ハらハすス
 来キぬヌるル 旅ツをヲ 身ミをヲ 思オモひヒにニたタらラへヘのノ
 身ミのノ果ミをヲ 悲カナしシきキ 水ミヅのノ川カハ乃ナ

八橋や蜘蛛の糸を思ふはかけぬ
 情の中に別を恨成らん
^{上見} 夕影の空はまじく
 慰めんは花を物にしあはれ
 既よ酒をよめんとは
 もいゆらんよすもは
 御の

今に
 涙のこぼれは思ふは
 かくるるの影の
 思ふは
 其時の子は
 たる情を
 機婦は
 思ふは

三人

唯今詠イ子ラ朝詠カタルハカタル亦ウなくも

小冊ダのハ作サびシ詩シをシ詠セばシ少ウ人ト也ナ

守シるベしト也ハ誓シひナりキク 去リ終ル

がら重ゲ衝チハシ今シ生シのウ命メをシなシ

唯ト来イ世セのウ縁ヰりシ我ガ身ミのウまカりシたレと

宣シへタ 毒クサ御ミをシ承シりシ 十ツ悪クと

三人

唯今詠イ子ラ朝詠カタルハカタル亦ウなくも

小冊ダのハ作サびシ詩シをシ詠セばシ少ウ人ト也ナ

守シるベしト也ハ誓シひナりキク 去リ終ル

がら重ゲ衝チハシ今シ生シのウ命メをシなシ

唯ト来イ世セのウ縁ヰりシ我ガ身ミのウまカりシたレと

宣シへタ 毒クサ御ミをシ承シりシ 十ツ悪クと

いハまシるハ縁ヰりシとシ 日ヒ 朝詠カタルしてシそ

かチあデけル 扱シもシ彼カをシ重ゲ衝チハシ

お玉のウ末スれハ子コとシ申シせシとシもシ先サ身ミ

小コもシ勝カをシ一ヒ切キてシもシ教シえテ父チ母ハの

究キぶハ銀ギのウ形カ 上ウ されシ時ト終ル

身ミ家ケのウ運ウン命メイ悪ク 日ヒ 洗シひシたレ

物モノはハらラ産ユまマてテ 婦メやヤ牡シ麻カはハの
 國クニ乃ハ生ナ田タはハ川カハはハ身ミをヲ捨スてテ 防フ錢ゼンをヲ
 中ナカせシたタ シメテ 表ウラのノ下シタ 風フウ未ミはハ葉エフのノ表ウラ
 日ヒ下カ シメテ 表ウラのノ下シタ 風フウ未ミはハ葉エフのノ表ウラ
 表ウラされレけレらラとト表ウラれたレたタまマ キリ
 今イマはハ持テらラよヨしシちチらラなナ キリ 幸サチ衛ヱもモ
 引ヒむムとトすスらラにニ 何ナニもモ 細ホソとトまマたタるル
イヅカ アミ

如ニくクふフてテ 遊ユウれレ兼ケン カネ 從ジュウ醒セイのノ生ナ捕ト
 まマつツ カネ 河カハ越エのノ 幸サチ房フウがガまマにニわワたタるル
 心ココロのノ卵タマゴはハ入イリニ ウメ 冥メイやヤ世セの中ナカにニ
 日ヒ 定サめメたタ ウメ ウメ 神カミをヲ月ツキ時トキ毎ツネにニおオくク
 奈ナ良ラ坂サカやヤ 尻シツ尾ビのノまマ ウメ 後アトりリあアをヲ
 とトいイふフ ウメ ウメ 角ツノもモ 深フカいイせセでデ 又マタ 謙ケン倉クラにニ

渡さるゝ後ハ何もそハ橋トモ井の
都つゝ又ニ河の國や幸江ホホタフシ足柄ホシノ
箱根おきててゆふやそらん星月
牧謙倉山よ入り六基又限りごと
おりひに別れハ後も思ひ移り
哀れ者と思ひ妻の灯火くらふ

日
してハ救新彦氏ハ渡の雨と頻る
救の空ニラニ四面ハ村々ハ寺の内チ
何とら思ひ者の神思ひの色も
おぬらん後と縁ておらまも雪の
あかしの枯てたまは花咲子もこれ
神ならんを祈りていさやぬさん

下 忘れぬや 序 舞 上 しと女 一樹の陰や一のれ水
 日 皆是地生の縁といふ白拍子をとて
 観ひける 主衛 生時を衛奥よ業
 一 琵琶をとりあせ給へ
 弦を又玉琴今の緒合よ
 合せて聞けば 日 上 山嵐の松風
しと女

一 海ひまにかり琴を枕の縁敷乃
 一 うち縁をなほ寝たて東雲もほの
 一 不のとぬ渡る空に しと女 影つらや
 一 成ぬき 上 日 浅るや成なんど
 一 河原を止給ふ心かの内を痛く
 一 きて お 上 新て室衛勅より お

又於よと有る武士身護一が
 強へシツメ子も信じたち出デ
 何中ワケ此其契りもやさぬニ
 離るハ神と神との霧洞ニ糸
 重ウカズ徳の有極目もあてらまぬ
 今ケ又シキなク

吉野静

梗概

(所)大和國吉野山

(季)十一月

源義経は梶原景時の讒言により兄頼朝の勸氣を受けたれば詮方なく都を落ちて一先大和國吉野山を頼み籠り居たりしが吉野山の衆徒ども心變りして鎌倉方に靡きければ止むなく又此山を披く事となりたり此時佐藤忠信は唯一人後に止まり居たりしが猶速く落ちのびさせんが為に都道者の姿となり衆徒の席に入りて問答に時を移させ静は舞の衣裳を身にまとい講堂に入り込み法樂の舞をまひなどする隙に義経は難なく落行きければ兩人も喜びて都へ立歸れりとなり。

吉野静(本三番目)

役別	装束	附
シ テ 静 御 前	面孫次郎 静烏帽子 鬘 鬘帶 着付箔 長絹 緋大口 腰帶 扇	
ワ キ 佐 藤 忠 信	着竹段野斗目 白大口 腰帶 掛素袍 小刀 扇 笠	

吉野静

^{日記}
 か極ふは者ハ判官殿の山内は侍也
 依者忠信よてハ扱も我君判官殿ハ
 当山を頼こふ統りふふよ又流統の
 心整う有により今御疾く当山を
 扱きにてふ其も供や毎うりしを

残り留り防矢はれとの事おす。残り留り防矢はれとの事おす。らう矢おとの面目とな一人とさるまてい又大々練者にして尻尾の詮議の由中ら復よを越へ皮バヤと存い狂言出シカク是れ送者にしていれ會のりはあとも存せよとい免有うまらにていシカク

上は一辨なきは終はは中あらせ
終よき由シカク十二騎とて
承りていシカク將。十二騎とて中も
余の勢方百騎二百騎とも向う
と極よ中ら部の者あふを信て
上はいといと法寺も宿坊も難なく

たしなむさうさうにぞかしなむなり。

^{ツ上}けよ六巻も角も ^ハい平らひそ

吉野山キチへなむちの浅

安か判安の後の詞めと恐しや

お帳中シのせん ^{シカク}

^{ヨ上}相も静も忠信が其契約とたが

いと家の形が味かき結ろひも信

進オソと待たれ ^{コ死}是の都者

にては郵の法ラ樂の由承り下向道を

忘れては建トもの法ラ樂成へんふらあ

舞をシ早め ^上何れの人とあま

なうミナや我経セはる狭き事世と

^日の海に身を投ぐ人の身を救へけれ
^日終よ上は一神とて笑ふより於に氷
 を悔いて泣き悔れ也
 娘も我れを知らず知る人
 多ふ事の時悔ぬるを知らず
 神の神 冥なるを多き物に

^日人ともあやめても我れも知らず
 野のつて志らまか 静にやせや
 静が静よ 病はれも非横を忘れ
 けり 神もや納め給らん
 冥に清代の静が静よ 冥に
 支神

人の教ひは依る威とまの人の又
神は加護によれり
彼別波ハ神迹をまの朝家と
敬む 頷る忠勤を挺んで私の
願之更なる人獲やすとも神ハ
心恋の政よやどるも終ふなきを

神が教の政よ 誓く終つたはし
ま 義経を守り終くと行るぞ
哀成が保 柳京村が其終るの
水とを思へば渡りや流るるあり
後波の逆指をえんと浮舟の橋系が
中車よも願義おていさる されば

義経の志は海をこぎ吉野の神に
 誓ひの真あらば頼朝もさぐり
 志され義経の怒火の勅と交洛陽
 の西南は分洞と成べし法はら
 當山は流統をめぐり東路し
 改依留仲の神は恵を懐きあふ

べしおかりしこそ忠なるはよあはれ
 深うして
 其名ゆゑある人こそ
 はん行ふは流統の尾徳忠信
 ならびかた精をよ人こそ

射られ給ふなと活きかたを實に成徳
申すすむ人ぞ我となりのけき

下
綾や志川 序年

上
賤や志づ 乃

苧環くるまへ

日下
むらゝと今ふ

なまよしもりね

上
たふらるる花の

面白さふ

時刻とら法して

進まぬも有けり又判官の武勇ふ
怖まえよ〜美經とばあどかせ
と全儀をくふる成徳も有けり
去程子時梅川てまゝ春も今も忠信
が買丸謀ふ難なく君をばあ〜
か静よ新成就して又故へ我

海にけれ

松 風

梗概 (所) 攝津

(季) 九月

中納言行平須磨の浦に三年程謫居の徒然の折、所の養人姉妹を選び名をも松風村雨と召されて寵愛しけるに行平都へ歸りて程なく世を去りぬ。諸國一見の僧此浦に來りしに一本の松に短尺のかゝれるを見て古の事を思ひ出でて行平松風村雨の跡を吊ひけるに姉妹の靈現はれ、行平の筐の衣裳を着し昔を忍ぶ妻執のゆめ、跡吊らはせ給へとて立去ると思へば僧は夢よめて、松吹風の音のみ残りぬとぞ。

松風 (本三番目)

役別	シテ	シテツレ	フキ
松風	村雨	旅僧	松並木 汐浪車
装束附	面小面 其他シテ同様 (扇不持) 水桶 面孫次郎 髷 髷帶 着付箔 腰巻 縫箔 腰帶 白水衣 扇 (物着ニテ風折烏帽子 長絹)		

松風

^{ひよ} ^上 ^死
 須磨や明石の浦 悠ひひく月
 諸君よ 是は 諸君一見の
 僧にては 我未西園を 今も 程ふ
 け秋思ひ 立 西園に 下り 須磨の 石
 の月を 眺め ぞ 思ひ 下 漸

といふ程にまよひの津の玉須くは浦
 とらやちよふ。又と成敗さよ一本の
 松のゆよ。れをおぢ短火と燃られてゆ。
 謂れき記事ゆはら。尋ねをやと
 思ひひんか〜
 思ひひんか〜
 といふ程の女人の志ありや。

ち中に埋もられを名に残る世の途
 として。爰らぬ文の松一本。嬰女は秋を
 残まらん。うはね。経を佛して吊ひ
 け。ハ。実秋の日れおま。と。程なう
 著てゆ。今秋はけ。雲の境をよ宿を
 かり。明あ。何の山。おれ。里まで。

なまこあひつふ ついで女 汐汲車わらわ

なる。おのちかへいふもさうおのち

ついで女 浪交料やまぬの浦 二人 月入

ぬらに袂う那 送る 秋子別

須人のく月お夜汐を汲うよ

声上 づづくし秋風海をきかぬ

彼平の中納 二人 関吹越ると

詠め給ふ浦は浪のよるくは実

音近た響の家里離れある海ひ路

の月よの介ふな 上 ぐふや

其まの葉形から舞う拵な死に葉

小舟 つぎ 渡りう存る世の中ふ

ついで

ついで

二人
下人
信よいせん 泥沫の汐汲車よる毎

な死あは 聖人の神をよ思ひよがたぬ

むらね 中 形をうり 経籍くある

世の中ふ 後もすむ 月のお汐を

し 汲らよ 新形く

我妻 一 忍び車をり 汐の

泣よ 残生を 溜り 水い 心よ 妻の

果つき 世中の 草は 落なら 日新ふ

消えう さまじきに 是 後よ 夢の 際

かく 怨害の 控草 徒らふ 朽海きり 朽

使り かり 月の 夜汐を 汲で

家路 不海り せん 面白や

別ては浪のなるきさの響の呼声遊ユウ
 小く 沖はちひさし深り舟のイサ
 二人 江に 舟なる月 魚屋の女や友子なるカホカリ
 聖分は風行れも実なる木の秋なりワキ
 多しあらんまごの数をくらやをイッ
 上 しばし 汐を汲むとて 汀は満干のウキ
ヤカニ

汐衣の 袖を結んで肩お掛ツキ
 潮汲ためと思ひを すすめシホ
小謡 とても 女車メウ 女メウ 女メウ 女メウ 女メウ
 かさなをく 若草は田鴨ツツ
 我は立發げ 四方の嵐も音を流してサマ
 秋を何とせん 更なる月をシノ
ヨ

あつなき 汲 煎 ありや 厨 煙
いせよ ちの な ち 人 けう き 秋
の せ ぶ じ け ら ん 松崎 小崎 の
登 月 を だ ぶ 新 を 汲 我 ち あり
く 運 ぶ ば を 見 陸 奥 の
其 名 や 子 賀 の 塩 竈 棧 が

日 上 塩 本 を 運 び へ 阿 漕 が 浦 小 汐
付 上 其 俣 勢 の 海 け 二 見 の 浦 ぬ ち び
世 ぶ も ち 松 の 村 立 産 む
日 上 汐 汲 や 幸 しく なる み ぐ ち
日 上 夫 唱 海 深 後 へ 尾 の 松 陰 小
月 我 隠 れ 芦 の 屋 上 灘 の 汐

汲(ひ)き水(みづ)を(と)りて(人)を(洗)は(つ)げ(乃) 梯(はし)に(上)りて(汲)み(水)を(汲)み(く)

見(み)れ(ば)月(つき)を(桶)に(あ)れ (と) (是)も

月(つき)の(入)り(や) (日)中(に) 嫉(や)も(月)あり

月(つき)の(を) (日) 影(かげ)を (日) 妬(ねた)み

三(さん)次(じ)女(にょ)の(車)を(月)を(載)て(う)る

と(よ)思(おも)ひ(ぬ)壇(だん)路(ぢ)の(な)や (乃) 壇(だん)屋(や)の

妻(つま)の(あ)つ(て)の(宿)を(待)つ(や)と(思)ひ(と)

い(ふ)け(壇)屋(や)の(ら)ち(り)末(すえ)内(うち)か(や)

淫(だら)に(て)渡(わたり)ゆ(ぞ) (乃) 行(い)き(ま)た(る)

修(しゆ)行(ぎやう)者(者)を(と)く(や) (乃) 叔(ぢ)の(宿)を(は)げ(ゆ)入

それ(を)も(待)つ(や) (乃) 主(ま)ふ(其)由(よし)か(ら)い

しんふちゆ。修行者の道りゆが。我の
 ち宿と作ゆ オホセ シツカニ 我だよもいふせだ
 郎よ何とてち宿をよまらすまきよふ
 やぶひゆ中ゆ ツマ 其ゆ中てゆふ。
 壇屋の内解りに見え苦らゆ程ふち宿ハ
 けふまぶひゆ中 オホセ コタ あら笑止や。
オホセ

上
 仍書前好を忘りてゆらふ一教と
 きて候ゆ カサネ ツマ かけひゆ海 侍
 暫く月の夜影よんをれ タテマツ 冥も
 是世を捨人よしくかる破屋の
 内松本様は竹の垣敷をほこそ
 思ふが火ふいさうてお泊りあれと
アシ シ 吟カハル バシナ ト ヨサム ト

一、^コ宿を^サまら^シせ^テそ^ノ宿^ヲと^シて^ハ
 中^ノ旅^トい^ヒ泊^ル宿^トも^ナら^ズ旅^バ
 何^レも^ト宿^ト定^ムる^ハ也^ト想^シて^ハこ^ノ
 宿^ノの^浦を^有ん^人我^トも^從て

一、^ト宿^ヲと^シて^ハ
 中^ノ旅^トい^ヒ泊^ル宿^トも^ナら^ズ旅^バ
 何^レも^ト宿^ト定^ムる^ハ也^ト想^シて^ハこ^ノ
 宿^ノの^浦を^有ん^人我^トも^從て
 一、^ト宿^ヲと^シて^ハ
 中^ノ旅^トい^ヒ泊^ル宿^トも^ナら^ズ旅^バ
 何^レも^ト宿^ト定^ムる^ハ也^ト想^シて^ハこ^ノ
 宿^ノの^浦を^有ん^人我^トも^從て
 一、^ト宿^ヲと^シて^ハ
 中^ノ旅^トい^ヒ泊^ル宿^トも^ナら^ズ旅^バ
 何^レも^ト宿^ト定^ムる^ハ也^ト想^シて^ハこ^ノ
 宿^ノの^浦を^有ん^人我^トも^從て

やあらうもや^上らね村^トの
事^トや^トて^トり^ト二人^トを^トら^トが^ト傷^トれ^ト
是^ト何^トも^トな^トる^ト事^トに^トて^トゆ^トそ

笑^上や^上と^上ひ^上内^上ふ^上の^上事^上が^上笑^上か^上う^上れ^上
侍^トら^トふ^トも^トや^ト海^ト庭^トの^ト人^トの^トら^トと^ト
孫^ト孫^トひ^トい^トし^トも^トあ^トの^ト物^ト語^ト録^トり^トふ

懐^トく^トう^ト侍^トら^トひ^トて^ト程^トの^ト端^トの^ト
洞^ト二^ト度^ト袖^トも^トぬ^トら^トう^ト侍^トら^トふ^ト
され^トも^ト程^トの^ト端^トの^ト後^トと^ト
今^トは^ト世^トふ^トと^ト人^トの^ト何^トなり^ト又^ト海^ト庭^トの^ト
方^トも^トな^トり^トあ^トと^ト承^トり^トい^トう^ト様^ト
よ^トも^ト名^トを^トい^トふ^ト者^トも^トあ^トら^トず^ト
何^トと^ト名^トを^ト

なのみき

コト

中コトの車二人コトよぶ

ふ名ふり

つぎ上

飛つぎ上のやうさんと

まればこころらふ事と人となん

何スもの世ふ改らてはつらき海乃

うらめウかりける契ヒりうあハ

はとクドキ何キもあめいこもあまの

るぼるクウ書ふの松カ尾デ村コの下

亡ナ法キとれあらせつら松尾村ナ二人

の女メけル満マ美ビ是マと来マりた星ホ扱シもあま

三年サ乃程ニは法ホきマの清シ松ネ扱ハび

月ツふ心コは清シの浦ウ乃ル扱ハ沙サを運ハぶ

誓チきマ少女メにニ姉イ妹イ扱ハれハあラせシ川

およぶまゝにあなたにやらせて松尾
村ぬらぬらと月を照らす深川の
壺の中 塩焼衣文の
縹のまぬは空を薫るあり 下で
こゝろよむる行年都より弦ひ
幾程なきて世をあらう 下で

弦ひぬらぬらと月 下人
まにても又いふ世は昔は
まつ尾を村ぬらぬらと月を照らすな
やなまに及ぬ世をあらう深川の
あやういふ羅深川の月を照らすな
弦へ 上 意符の意も思ひもわが

^{カルク}くは程先之訓衣のこの日此
^{コトカ}をらひや本路四よれ神乃さすけも
^後なまのよありれ消し憂勇か
^ク下セ哀古しを思ひかき懐りしや
^{アハレ}イニ仍平の中納き二年に爰ふさやあ
^ウ浦越より強ひしふけ程の逢とて

^シ立馬帽子将衣と跡を強へ
^エとも是とつる度と
^ヤ末に踏ぶ家のつるも
^ヤあそ何ち現あや
^カなれ是あし忘る懐も有なん
^{コト}詠も理や
^{コト}

上シテ骨ハネにヨロ従ツてコのぬるかり衣付テ

日ヒ惣カケてそ輕カむ同じ世ふ任ひのらぶ

我ワを忘れ形をなすと捨スても

我ワを忘れ形をなすと捨スても

日ヒ惣カケてそ輕カむ同じ世ふ任ひのらぶ

為シ方方潤潤む伏港港むりを悲し死物物着着

下下之シ津津川川終終えぬ海海の浮漕漕ましるる

恋恋の測は有きり 意意結結ましるる

松松後後より年年々々心心立立ち何らか松松尾尾と

足足れ侍ふぞいてあらうあらう

浅浅るまやた様様の心故故まそ愁愁心心の

深深まも港港と終へ中女女波波女女にての狂乱乱を

物忘れ強きぬぞや^上 阿まの松よて
我ら^上の早に思立も侍らぬ物を
愚^上の人乃云事や^上の松を^上の早
よた^上と^上替^上く^上別^上家^上とも^上や^上所
と^上や^上ら^上ぬ^上と^上ん^上と^上連^上ね^上結^上ひ
言^上ひ^上て^上は^上い^上ふ^上 實^上なる^上を^上忘^上れて

侍ら^上ふ^上ぞ^上 經^上念^上志^上を^上く^上別^上き^上とも
また^上を^上来^上ん^上との^上言^上は^上き^上と^上た^上か^上に
忘れ^上ぬ^上松^上尾^上の^上立^上海^上り^上ん^上の^上清^上行^上
終^上も^上ゆ^上ら^上村^上ぬ^上の^上袖^上志^上づ^上我^上
濡^上る^上とも^上 松^上よ^上か^上を^上ら^上で^上海^上り^上こ^上ば
急^上報^上ゆ^上め^上 歌^上や^上 立^上別^上れ^上
イロ(掛リ) 中(舞)

^{仕上} 周^上 後の山は峰は生かす松とてや

今海にん まいあなをき山松

そなつく君愛は浪た乃浦ま

松の形平立海りこば我もみ陰よ

いさあめで磯別松の懐うや

^サ松^ルは吹^キ来る風も狂^イて浪^ノの音^カ波

まげしおをまきぐらま女靴のあなよ

えとゆるなり我泣予ひてたむあ

いと海をてゆり浪のきよ浪たの

浦もきて吹やうし浪の山おらう

閑踏のちも声ぶにるあも路なく

夜もぬて村あふみうをうんた

松尾むらりや跡ららん

中

一

江口

梗概 (所) 攝津

(季) 九月

江口の君の靈西行法師と歌詠みかわしたる昔語りをすも事を作る是は西
行の書ける撰集抄に書寫の性空上人正眞の普賢菩薩を拜みたと祈
念しけるに我を見たくは室積ムロツキの遊女を見よとの靈夢を蒙りしかば即ち江口
桂木などいふ遊ひの里に行て目をふさぎ心を静めて見給へば江口の君は白象
の上に普賢菩薩と現じて座し居給へりといふ物語りによりて作れるなるべし

江口 (本三番目)

役別	装束附
シテ里の女	面孫次郎 髪髪帯着附摺箔唐織扇
後ニテ 江口遊君	面増女 髪髪帯着附箔鉾大口唐織壺折腰帶扇
シテツレ 侍女二人	面小面髪髪帯着附箔唐織 (内一人唐織石扇ノ腰ヲ持テ持髪ニ平光結付ル)
ワキ 祿僧	角帽子小袴子大口水衣腰帶珠敬扇
ワキツレ 從僧二人	角帽子無地對斗目大口水衣腰帶珠敬扇
作物	家形松

江口

己元
連上
ヨ
牙

月己元連上ヨ牙母有れ友己元連上ヨ牙な己元連上ヨ牙ら己元連上ヨ牙ぶ己元連上ヨ牙〜己元連上ヨ牙世己元連上ヨ牙の己元連上ヨ牙糸己元連上ヨ牙

行己元連上ヨ牙の己元連上ヨ牙烟己元連上ヨ牙から己元連上ヨ牙海己元連上ヨ牙〜己元連上ヨ牙是己元連上ヨ牙の己元連上ヨ牙都己元連上ヨ牙方己元連上ヨ牙より己元連上ヨ牙

出己元連上ヨ牙る己元連上ヨ牙僧己元連上ヨ牙にて己元連上ヨ牙は己元連上ヨ牙我己元連上ヨ牙い己元連上ヨ牙ま己元連上ヨ牙ご己元連上ヨ牙西己元連上ヨ牙廻己元連上ヨ牙を己元連上ヨ牙
 見己元連上ヨ牙せ己元連上ヨ牙い己元連上ヨ牙程己元連上ヨ牙ふ己元連上ヨ牙只己元連上ヨ牙今己元連上ヨ牙思己元連上ヨ牙ひ己元連上ヨ牙ま己元連上ヨ牙〜己元連上ヨ牙夜己元連上ヨ牙深己元連上ヨ牙き己元連上ヨ牙ふ己元連上ヨ牙
 と己元連上ヨ牙志己元連上ヨ牙は己元連上ヨ牙キ己元連上ヨ牙ヤ己元連上ヨ牙上己元連上ヨ牙都己元連上ヨ牙を己元連上ヨ牙ぶ己元連上ヨ牙ま己元連上ヨ牙〜己元連上ヨ牙夜己元連上ヨ牙深己元連上ヨ牙き己元連上ヨ牙ふ己元連上ヨ牙

旅を立てて 渡の川も亦
鶴居の昔は かのま
の浪よまをる 江はれ里も亦
乃里よもて け知にて 江の長れ
旧跡と尋ねる ぶく
急な 福よも 江に

上 扱はる 成が 江の 君は 跡なる
生身は 中 小 埋も れども 名は
と 悔りて 今 迷も 昔 跡の 旧跡を
今 入る 事の 長 実や 西 行
法 師は 知よて 一 枚の 宿を か けらる
主の 心 なる 世 中

上
 此の世に惜みあらせたりしは理を
 もやせん為よは是迄致しぬ来りたり
 しかば唯西行法師の詠ける路を
 只何となぐもつむふよは此の世に惜ま
 ずりたりとさしつり給ふは家にて
 成人ふて海まをぞ
 上
 さら

さればそ後のやとつと惜むとの
 此の中も知られねばぬ由
 の心せらむとかしなると何とて
 上
 祿もせむと給はらん
 今思ひかたりいでその世に
 上
 此の世に世をいふ
 上
 人

笑ハ彼の宿^カふとむじなとあふ斗^コを
とむあし捨人^トを味^イめやそ女の
やどりに^上とあきらめとあきらなら
まや^コ実^コ理^コなう^コ雨^コ行^コも^コ彼^コの^コ宿^コ
まを捨人^トとし^トけ方^コハ名^コふあ
笑^イ好^コの家^コは^コか^コ〜^コ母^コの^コ人^コ

志^コき^コぬ^コ車^コの^コ多^コき^コ宿^コと^コ心^コ
とむなと味^コめ^コふ^コ捨人^トを
思^コふ^コ心^コある^コ味^コ惜^コむ^コあ
この^コ味^コ惜^コむ^コそ^コま^コの^コ飯^コれ
宿^コなる^コに^コあ^コや^コ惜^コむ^コとい^コふ
波^コの^コぬ^コら^コぬ^コた^コ今^コも^コ捨人^トの

世^ヨ流^ガふん^チなとめ^シ娘^シひそ^キ 上ロシキ 実^ウや^キ
浮^ウ世^キの物^シ流^リの^シ女^メもたそ^スう^キに
かげろふ^シ人^トい^ハなりん^ヤ 上 女^メ身^ミ不^レ
た^ズむ^シ難^シの^シと^クさ^クさ^クき
ある^川隈^ノふ^レ江^ノ口^ニ流^キの^シ君^トや
見^ハん^知る^ヤ 上 扱^ハ難^シひ^シ意^ハ成^ル

の^シ浪^ノと^シ消^スる^シ跡^ヲあ^キや 上 娘^シふ
住^ミ来^ル我^ガ宿^ノの^シ梅^ノの^シ枝^ヲや^見ん
つらん 上 女^メ思^ヒひ^ノの^シ外^ニは^ナ 上 君^トが
来^マさ^せる^ヤ 一^ツ樹^トは^シ松^ノや^宿り^{けん}
又^シ一^ツの^シ流^キを^シれ^ばづ^と級^テも^志流^ル
召^サれ^まや^江の^シ乃^ハ君^ノの^シ笛^ヲ吹^くと^声斗^ル

志く夫ぶたり

中入

扱

江はれ若返り歌れあひたるをや
しあは跡吊らんといひも入籍
あしきやかち月波渡るの氷
に抱女の囀をみ抱び月ふえとる
ゆははなよ

舞河舟を

笛々逢瀬の波枕
の夏をうん羽をくせ教るうぬ身乃
まうかさまは用姫が松浦深さ
まぐ袖の潤は厚七郎の名跡なり
又宇治の楊姫も訪はんとせぬ
人を待も身のととを忘れなかり

ら

ハ

キニ

下^シ女^メ一^ツウ^ニヤ^ハ野^ノの^ニ一^ツ花^ハも^もあ^らず

も^も波^ハも^も表^ハ世^ニに^ニあ^らは^なか^らず

上^リ見^ル不^レ思^ハ夜^ハや^やな^な月^ハは^はは^はる^る水^ハの^ハ面^ハも

抱^キ女^ノの^ハの^ハま^まと^と見^ルひ^ひ色^ハめ^めた^たく

た^たる^る人^ト船^ハへ^へも^も誰^ノ人^ノの^ハ船^ハや^やらん

上^リ女^メ何^レに^ニ船^ハを^を待^マが^が船^ハへ^へか^から

古^クの^ハ江^ハに^には^はれ^れ抱^キ女^ノの^ハ川^ハ道^ハも^も遠^ク乃^シ

月^ハは^は船^ハを^を心^ハ遣^ハせ^せよ^よそ^そも^もや

江^ハの^ハ抱^キ女^ノと^とま^まの^ハ法^ハも^もた^たの

や^やち^ちと^と心^ハ遣^ハせ^せよ^よ月^ハは^はあ^あら^らず

ら^らあ^あ我^レら^らの^ハ船^ハも^も人^トも^もあ^あら^らず

ち^ち人^トも^も現^レな^なか^から^らず

おかしなあかき
まじやまじ

むしや
秋の氷にまじり

落ちてきぬかの
月も影さる

小謡
舞の身
たぐや調うさかしの

哀れ者の意しを今も抱女

の身抱ひ世を渡る一筋を現ひて

いざや抱だん
ま十二個縁の

流傳の車の音はあぐるが如く

多の林を抱ぶは似たり
お生

又あはせ
あつて生むの糸をからす

来世は来世又も世をなほ
とを

あふ事なし
或ひは人仲

天上の苦果をうくとしども
顛倒迷妄してしまふ解脫の程を
極む 上女 或は途入難の悪趣よ
墮して 日 愚にさらきて殊ふ
費心のなるちを失ふ
下女 然る我のたまはく 笑ふ

人牙をまたうとしども 日 罪業
深き身と生れ殊は例一少あり
河竹の流きの女となる前は世の
報ひ速思ひやる我地しれ ホ
紅衣の春は朝に彌縞の山裾ひを
なほと見えし夕の月も誘ひを

貴義の秋は夕。貴嶺嶺の林を
 含むもいとも朝の霧よ川らふ
 中 松風狂月ふ月をかきつ 嶺客も
 きて来る事もなく 羽長紅圍
 お枕と双べ 妹背もい川のるふら
 隔川らん 心きた草は 情ある

人倫何きまれを 遊るべき 形
 思ひ知ながら 或時 笑ふ
 貧者の思ひ 浅からん 又或時
 声をとて 世物の心は 深きと 思ひ
 口ふ言ふ 女探れ 縁となら ものを
 実や 皆人とし 花の境よ 思ひ

マフ

ト

ノ根の羅を伴る車もらんるらゆきと
上

お迷ふか成り
面白や 序舞アリ

上
實れ海漏の大海よふ葉六欲の風は

吹ねども 頭南ノル 縁き如の波は

またぬ日もある
あちちを何故ぞ 恨なる宿に

ん
かむむる故 日上一 かなあまの母も

あらし して女 人をも慕は 日上一 待

昔もななく して女 別れ路ものらしあ

日上一
花よ如葉の月きのぬるともあら

よーあや して女 ねもへを恨れ宿

日上一
思へ仮の宿ふ して女 ひとむあし人をたよ

中一え一トノ一ラ入一タ一ト
 凍め我なるは是迄なりや海るとて
 別ちる者買負^チき^ボ後と歌をれ^{位カハル}和
 向象となりは^{ビヤク}ガウ^{スナハ}光りとなふ白妙の
 向象よお^{ハクサン}ふ^ニ西の空よ^ニ好^ニ子
 有^ニ難^ニく^ニそ^ニ覚^ニえ^ニた^ニる^ニ者^ニ有^ニ難^ニく^ニそ^ニ我
 松がゆき

昭和四年四月五日印刷
 昭和四年四月十日發行

著作権
 所
 不
 許



訂正者

金剛右



發行兼

檜常之助



發行所

東京市神田區錦町丁目拾番地
 合資
 會社
 檜書

京都市二條通麩屋町東北角
 檜書店京都出張所

終

